

「農芸化学とは何ぞ」——後藤格次先生の序文より

農芸化学全体について書かれた3冊の本を紹介します。なお全部絶版です。

1. 後藤格次（東大教授）「農芸化学汎論」昭和6年 共立社
2. 田所哲太郎（北大教授）「農芸化学の30年」昭和16年 丸善
3. 石塚喜明（北大教授）「農芸化学」上・下 昭和18年 朝日新聞

このうち後藤先生の本の序文は、現在も生きている諸問題を提起しておられるので、ここに再録して、御参考に供したいと思います。

序

「農藝化学とは何ぞ」とは單に科學に縁遠い一部人士から發せられる疑問でなく、中にはそんな事はとくに心得て居らるべき筈の人々からも、屢々聞かされる疑問である。しかも工業化學に於いては、かゝる疑問の發せらるゝことは、餘り耳にせぬ。そは工業化學は、化學を俟つて初めて行ひ得る工業であることは字義の上からも明かなことであり、且つや工業の在る所には、工場あり、煙突あり、その下に純物理的の機械工業の行はるゝにあらざれば必ずや化學工業の行はるゝに相違なけれども、農藝化學の在る所には——世人は農藝と聞いて直ちに農場を思ひ、牧舎を思ひ遂に化學を思はないのである。それもその筈、吾人の祖先は何等の化學の知識なくして太古より農業を營み、近く五

十年以前まで立派に衣食の材料を茲に得て居たからである。この考に慣らされた世人が「農藝化學とは何ぞ」の疑問を發するのは寧ろ當然なことであつて農藝化學者は之に答ふるの義務ありとも云ふべきものである。

本書は實にこの疑問に答ふべく、書き下されたものである。従つて題材を汎く農藝化學全般に取り、土壤、肥料、細菌、農産製造、醱酵、纖維、農産の利用、營養、畜産、水産に亙り、要點をつかむで端的に之を説明し一般讀者の理解に便なるを計つたのである。しかし、又他方より本書を見れば、農藝化學に關する重要事項を能ふ限り網羅せんと努めたるが故に農藝化學を學ばんとするものゝ入門、或は已に學びたるものゝ備忘として、農藝化學綱要たるの務めを盡し能ふべきを庶幾せるものである。而して本書を一貫せる指導思想は自然經濟の見地よりしては人類社會に對し、國家經濟の立場よりしては現下の我國産業に對し農業の重要性を強調し農業に於ける化學の位置を明かにせんとすることに在る。本書は渺たる一小冊子にすぎざるも、如上の三目的を達せんとする云はゞ悠深き企圖である。只この企圖が幸にして成功せりや否やは大方讀者諸氏の清鑒に俟つより他はない。

昭和六年十月

北里研究所に於いて

著者誌るす

(高橋 健)